

台湾の特色のある相声を探し求めて（後編）

戸張東夫（元産能大学教授）

1949年に戦火の中を国民党軍とともに慌ただしく台湾にやってきた中国の相声がこの難しい風土の中で、なんと60年もの長期にわたって存続し、しかもいまなお多くのファンに支持されている。これは奇跡に近い壮挙というべきであろう。

呉兆南、魏龍豪が台湾の相声を支える

何が、誰がこの奇跡を起こしたのであろう。民間人の呉兆南と元軍人の魏龍豪、才能に恵まれ、相声を愛してやまないこの二人の名人クラスの相声芸人の奮闘努力のたまものといっていると思う。

呉と魏の二人は、台北の舞台に初めてともに立ち対口相声を語った1951年以来1999年に魏龍豪がガンで病死するまで半世紀近くコンビを組んで台湾の人々に笑いをおくり続けた。語った相声は300を超える。いずれも『相声集錦』、『相声選粹』、『相声捕軼』、『相声拾穗』の相声集四巻、CD48枚に収録、出版され、衰えぬ人気を誇っている。残念なのは二人の舞台の映像を記録したVCDが、わずか二枚しかないことだ。だがむしろ二枚だけでも残っていることを感謝すべきかも知れない。この二枚は魏が死去するわずか数か月前の最後の共演を記録したもの。これほど多くの公演記録を残した相声芸人は中国でもないと思う。

呉と魏の二人は「いちばん長い期間相声を語り続け、台湾の相声に最大の貢献をした」と呉兆南相声劇藝社の劉增鏞リュウツォンカイ氏は語っている。二人はまさに台湾の相声を支える存在といっているであろう。

信じられないことだが、呉も魏も台湾に来る以前に相声をまったく学んでいない。もちろん舞台に立って相声を語ったこともなかった。この点は



呉兆南、魏龍豪（左）コンビ最後の相声集『相声拾穗』④のCDケースカバー

台湾の他の多くのにわか相声芸人と変わるところはない。台湾に教えを請うべきプロの芸人が皆無であり、中国との交流が断絶している状況の中では他の芸人と同様、せいぜい中国で聴いた相声を模倣し、再現する程度のことしか二人には出来なかったはずである。多くの相声芸人が戦線離脱するなかで、どうしてこの二人だけ生き残り、台湾の相声界をリードし続けることが可能だったのであろう。

実はこの二人にはほかの芸人たちに欠けている経歴と資質が備わっていた。第一に両者とも北京生まれの北京育ち。正確な北京のことばをきれいに話すことが出来た。第二に、二人が誰よりも相声を愛していたことである。とくに呉は幼い時から大の相声ファンで、当時“女こどもが観るものでは無い”と言われた相声を観るため、親の目を

盗み、学校の授業をサボって劇場に通い詰めた。しばしば楽屋にまで押しかけ、後に国宝といわれた相声の名人侯宝林ホウバオリンら高名な芸人の知遇を得るなど、相当の入れ込みようだった。自分でも気がつかないうちに諳んじてしまった相声も少なくなかったのではあるまいか。魏の北京時代は知る人は少ない。だが後年の魏の相声の普及や保存のための努力を見れば、相声に対する魏の深い思い入れは誰の眼にも明らかであった。

また、二人とも京劇に自信があった。魏は台湾にやってきたときは軍の京劇隊のメンバーだった。呉は小さい頃から高名なベテランの京劇俳優に正式に弟子入りして学んだばかりか、子役として舞台に立った経験もあった。相声には京劇を扱うものが少なくない。この経験は後に随分役に立ったのではなかろうか。

加えて二人は相声を天職と考えるひたむきさと逆境にめげない忍耐力を身につけていた。また呉は衆に抜きんでた記憶力の持ち主で、魏は相声を後世に伝えなければという強い責任感を抱いていた。こうした要因が二人を台湾一の相声芸人に押し上げたに違いない。

二人が語る相声はほとんどが伝統相声だった。新作を作る自信が無かったからだとも言われる。このため二人は台湾に来る前に北京で聴いた伝統相声を出来るだけ原型のまま、元の味わいを忠実に模倣し、整理し、再現することに全力を注いだ。後に「二人の相声は伝統相声の味を忠実に残している」と評されたのはこの努力の結果である。中国では政府の意向で長い間伝統相声を語る事ができず、伝統相声離れが相声界で深刻な問題になっていた。このため中国でも二人の相声には一目おいていたのである。

呉兆南も、魏龍豪も相声は素人だった

呉兆南は1926年北京の金融事業家の家に次男として生まれた。幼時から京劇を学び、相声にも親しんだ。北京の中国大学経済学部で学んだが、卒業の年の1949年家族を残し一人台湾に渡ったため正式に卒業できなかった。民間人の難民で、

職業に従事した経験も卒業証書もなかったため、京劇俳優として生計を立てることを余儀なくされたが、1951年相声芸人に転じた。

1960年代に入り台湾がテレビ時代を迎えると、相声は振るわなくなり、急場しのぎに焼肉料理店を開いたこともある。1973年3月アメリカに移民、ロサンゼルスに居を構えた。米国籍を取得したことから訪中が可能になり、中国の相声、京劇界との交流も実現した。米国では中華料理店で皿洗いをしたり、中国式のビーフジャーキーを売り出したりしながら台湾だけでなく現地の華僑社会で相声や京劇を広めることに尽力する。1982年4月旧知の中国の相声芸人、侯宝林が香港を訪れた機会に、同地に飛び侯に弟子入りした。たとえ形式だけでも「弟子入り、しなければ正式に相声芸人と認められないからであろう。

1999年相声の話芸を後世に伝えるため前出の劉增鏞、劉爾金ら6人の弟子を受け入れた。この6人が作ったのが「呉兆南相声劇藝社」。毎年定期公演を開いている。

呉は伝統藝術を伝承する功績を称える政府の「薪伝奨」を受賞したほか、「台北市伝統藝術藝師」、



郎祖筠(右)と劉增鏞の対口相声(2014年1月呉兆南誕生記念ロサンゼルス公演)

一般に「人間国宝」と呼ばれる「伝統藝術保存者」の称号などを授与された。

なお台湾出版の『台湾光華雑誌 (Taiwan Panorama) 日本語版』(台北・光華画報雑誌社、第38巻、第12期、中華民國102年12月)が昨年(2013年)末呉の京劇俳優としての活動を紹介している(118~124頁)。

魏龍豪は1927年北京生まれ。生家は北京の琉璃廠で骨董店を開いていた。北京師範大学付属中学に学び、1949年国民党軍とともに台湾に渡った。当時魏は軍の京劇隊の隊員として京劇を演じていた。その後相声に転じるが、後年次のように述懐している。「軍に従い台湾に転進した。当時は京劇隊の一員だった。軍内の慰問公演の仕事以外にすることがなく、とても暇だった。そのうちプロの相声芸人が一人もいないことがわかったので、『山中にトラがいなければ、サルが王様だ』とばかり、あつかましくも相声を語る気になった。はじめ短い相声をいくつかまとめて金門、馬祖両島の前線基地の慰問公演で演じたりしていたが、やがて正式な公演の場でも図々しく相声を語るようになった。」1951年呉兆南とコンビを組んで相声芸人として舞台に立ったが、二人とも薄氷を踏む思いだったのではあるまいか。また魏にはラジオの相声番組の司会を担当した経験もある。

映画に出演したり、テレビアニメの声優を勤めたのは相声では生計を維持できなかったからであろう。1965年から1983年にかけて映画25作品に出演したという。

1986年相声グループ「龍説唱藝術実験群」を創設、弟子を受け入れた。また相声の普及や保存のための資料整理や講演活動に熱心に取り組んだことから、「台湾相声の父」と呼ぶものも。「薪伝奨」、「中国榮譽文藝獎章」などを授与された。

「満漢全席」、「黄鶴楼」、 「口吐蓮花(お立会い、奇術だよ)」

ここで二人の代表的な相声をいくつか、さわりを中心に紹介しよう。呉は呉兆南、魏は魏龍豪の略である。

まず「^{マンハンチュエーションシ}満漢全席」。これはよく知られているように中国全土の有名な料理をそろえた清朝の宮廷の宴席のこと。いまは中国各地の有名料理を集めて「満漢全席」として提供する中国料理店もあるようだ。

この相声には導入部とおちの部分にはいくつかのバリエーションがあるが、さわり、聴かせどころはどれも同じ。満漢全席でテーブルに並ぶ料理名を呉兆南が一气呵成に語る場面だ。

まず呉が魏に「満漢全席をご馳走しよう。」と声をかけると、魏が「大きなことを言うなよ。満漢全席を食べたことがあるのか?」と相手にしない。「一再ならず食べてるさ。」と呉、魏がすかさず「そんならどんな料理が出たかいってみろ。」と追い打ち。そこで呉がしぶしぶ料理名を早口で列挙することになる。聴きながら数えてみたら202品目もあった。大変な数である。この料理名を列挙した部分を中国では貫口コアンコウという。ここは歯切れよく、立て板に水を流すように語らなければならない。ひとつでもいい間違えたりしたら、面白さは瞬時に失われてしまう。誰にでも出来る芸ではない。記憶力抜群の呉の腕の見せ所というわけだ。

次に「^{ホアンホオロウ}黄鶴楼」。黄鶴楼というと中国湖北省武漢の名勝を想起する向きも多いであろうが、京劇のよく知られた演目のひとつ。東漢が衰退し魏、呉、蜀が台頭して誰が味方か誰が敵かもわからぬ混戦が展開される「三国志」の時代を背景に、二人の武将の火花を散らす対決を語る。呉の武将周瑜は宴会を口実に蜀のリーダー劉備を騙して誘い出し、黄鶴楼に監禁してしまう。戦わずして劉備の領土を奪いとろうと画策したのである。だが劉備は諸葛孔明が事前に用意した策を用いて無事脱出することが出来た。これが京劇の「黄鶴楼」である。

相声は京劇のこのタイトルをそのまま借用したのだが、内容はまったく異なり、中国の京劇ファンにしばしば見かける憎めないタイプの人物像を戯画化し茶化したストーリー。

中国の京劇ファンには観るだけでは満足できず、舞台に立ったり、大勢の前で歌ったりしないと気がすまないというものが少なくない。中国で

はこれを^{ピアノヨウ}票友という。要するに京劇の天狗連である。呉と魏の二人の票友が顔を合わせ、京劇を二人で歌って楽しもうということになる。京劇のカラオケである。魏は「京劇のことなら知らぬことは無い。」とか「どんな役柄でも歌い分けることが出来る。」など大きなことばかりいっているのに、あまり気が進まぬ様子だ。そこで呉が『『黄鶴楼』を歌ってみよう』と提案して、役柄を決めていざ歌いだして見ると、魏は有名な「黄鶴楼」のタイトルも、登場人物も、もちろんセリフも知らないことが次第に明らかになってくる。魏が馬脚を現す過程でいろいろトンチンカンなことをいったりしたりするたびに笑いが巻き起こる。

呉も魏も京劇の下地があるから所作といい、セリフの発声法といい堂に入っている。このコンビがよく取り上げる演目である。

三番目は「^{コウトウリエンホア}口吐蓮花（お立会い、奇術だよ）」。「お立会い、奇術だよ」は中国語のタイトルを翻訳したものではない。筆者が加えた題名である。直訳すると「口から蓮の花を噴き出します」という意味。これは奇術のひとつ。この相声で採りあげる。

呉はかつて気功を使う奇術を習ったことがあるという。それは「口吐蓮花」という奇術。水を一口のみ、それを気の力で再び口から噴き出して蓮の花の形にする。花の中には小さな童子がおり観客に三回お辞儀をすると姿が消える。水が地面に落ちると普通の水になっている。そういう術だという。魏は、呉にそんな器用な芸当が出来るわけではない、とまったく信用しない。だが観客の拍手に押された形で魏が「実演して見せてくれ」と呉に頼む。

呉は気が進まない表情でいう。「実演するには必要なものがある。ひとつは茶碗いっぱいの水。これはここにある。だが、神仙に祈る呪文を唱えるときに叩く銅鑼が無い。代用品として魏の頭を扇子で叩くから、そのたびにコワンコワンと口で音を出してくれ。それから最後に気を集めて私の顔が真っ赤になったころあいを見て、『パパ、いまだ』と言ってくれ。」

魏がよし引き受けたと応えると、呉は舞台の中央でまず茶碗の水を口に入れ、おもむろに呪文を唱えながら魏の頭を叩きはじめた。一句ごとに頭を叩くのだが、ふざけた内容であるのに呪文がやけに長い。頭を叩かれる魏も閉口している。呪文が終わると、呉が舞台中央に仁王立ちになり、腰を落として気を招き寄せるようなしぐさを始める。力んだため呉の水を含んだ顔が真っ赤になる。そこで魏が「パパ、いまだ」と声をかけるが、声が小さかったらしい。魏が再度声をかけると、呉が突然力を抜いて立ち上がり、「きょうは駄目だ。水を飲み込んでしまった！」と応えて幕となる。

大道奇術師は「不思議な術を見せる」といいながら、別の話ばかり続けて最後まで何も見せないという手口をしばしば使う。それを皮肉りながら再現した。まくらの部分で呉が持っていないはずの茶碗を一つ突然取り出して観客を驚かせる演出が効果的だった。意味不明の呪文だったが、大道奇術師の雰囲気を感じられ面白かった。こちら辺りは伝統相声の味といったらいいだろう。

以上紹介した相声はいずれも伝統相声。三つとも呉兆南と魏龍豪の1998年12月のアメリカ公演のVCDから採録した。これがこのコンビの最後の舞台となった。魏はこれから間もない翌1999年3月ガンで死去した。ガンを抱え、覚悟の上の米国巡業だったのである。

いかに台湾らしい相声

「天下帰誰坐（ナンバーワンは誰か?）」

最後にもうひとつ是非とも紹介しておきたい相声がある。^{テイエンシアコエイシエイツオ}「天下帰誰坐（ナンバーワンは誰か?）」である。これは数少ない呉兆南の新作相声のひとつ。新作とはいえ、前半は古典的なことば遊び、後半がタイトルに示されたテーマという構成になっている。このためひとつの作品としてのまとまりに欠けるし、また後半だけという制限もあってか、内容が表面的で、何をいわんとしているのか作者の意図がよく伝わってこない。残念ながらとくに出来がいいとか、面白い相声ではない。それにもかかわらず紹介するのは、これが

いかにも台湾らしい相声だからである。その点をご了承いただきたい。呉兆南（呉）と弟子の劉爾金（劉）による対口相声である。

呉 われわれのいまの総統は陳水扁だ。総統は台湾の最高のポストだ。つまりナンバーワンだ。

劉 誰もが望むポストだ。

呉 与党民進党（民主進歩党）でいま誰がこのポストを一番欲しがっているか知ってるか？謝長廷、謝市長だ。高雄の。謝長廷は、自分と陳総統の学歴も、経歴もほとんど同じだから、陳水扁が担当したポストには自分も就きたいと考えている。

劉 そういえば二人とも台湾大学出身、弁護士だし、ともに民進党党主席だった。しかもともに直轄市の市長経験者だが（陳は台北市長、謝は高雄市長）、謝長廷総統はまだだった。

呉 2002年10月だったか玉山の総統官邸でパーティーが開かれた。民進党の大物たちが勢ぞろいした。酒の勢いか、謝長廷気が大きくなって、自分の願望を漏らしたんだ。自分も総統の座に坐りたいといったのさ。手を叩いて支持するものや苦笑するものがいたという。

劉 それで陳総統は何と言ったんですか？

呉 陳水扁は笑いながらいったそうだ。「それは何ともいえんよ。たとえばいま僕がある場所に坐ろうと思う。でも君は同じところに坐れないな！」それを聞いた謝長廷、「よし、君と同じ場所に坐れなかったら、僕は総統のポストを諦めよう。」

劉 受けて立った？

呉 すると陳水扁が「よし、誰も動かないでくれよ！」といいながら、落ち着き払った様子で席を立ち、ある場所に坐った。そこでポーズをとり、「写真を撮ってもいいぞ！」

劉 陳総統が坐ったんだ！

呉 見ると謝長廷は顔面蒼白、口をぽかんとあ

けたまま、頭を垂れ自分の負けを認めた。

劉 陳総統はいったいどこに坐ったんですか？

呉 陳水扁は謝長廷の膝の上に坐ってな、「同じところに坐ってみろよ！」と謝長廷にいったんだ。

劉 自分の膝の上に自分で坐れるわけがない。

呉 一生坐れっこないさ。

（2003年呉兆南師徒聯演「ウウシイションフエイ呉室声蜚」劇場版VCD下より採録）

陳水扁の発言を、呉兆南が本人の声色をまねて話すと拍手、喝采だ。呉の声帯模写が陳の特徴をよくとらえていたということなのだろうか。それとも陳に関して当時聴衆の笑いを誘うような要因が別にあったのであろうか。政治家や有名人のゴシップ、また時事問題などを取り上げた相声には、現地の人でなければわからない笑いの要因が隠されていることがしばしばある。そうすると筆者のような外国の相声ファンはお手上げである。

謝長廷はその後行政院長（内閣総理大臣）も経験したから、陳と謝は文字通り台湾政府のナンバー1とナンバー2である。このような政府高官を名指しで取り上げ揶揄する相声がまかり通るのは台湾だけである。中国でこの二人に相当する政府要人といえばシイチンピン習近平国家主席とリイコチアン李克強首相である。この二人を、いやもっと地位の低い政府高官にしても名指しで話題に取り上げる相声など、相声の本家本元の中国では絶対に考えられない。少なくとも筆者は聴いたことがない。

同じ相声なのにどうして違うのか。要するに議会制民主主義の確立した台湾と専制王朝の伝統を受け継いだ共産党の一党独裁制度を続ける中国との違いである。台湾ではどのような政府要人でも国民の普通選挙によって選出される公僕だ。国民がこれらの人たちを笑いのタネにしたり、批判することは言論の自由の原則からも正常な行為としてまったく問題にならない。ところが中国では言論の自由が憲法で認められているものの、政府当局と国民の関係は事実上支配者と被支配者の関係だ。だから国民が相声などで政府当局や当局者を

取り上げると、それは被支配者の支配層に対する干渉とみなされるか、あるいは支配層の一部が何か目的があって「やらせた」こととして大問題にならざるを得ないのである。筆者が「天下帰誰坐」をいかにも台湾らしい相声と評した所以である。

中台関係が好転、台湾の相声にも変化の風

台湾と中国が関係改善の方向に進み始め、相互の往来がかなり自由になったのに伴い、台湾の相声と相声界にも変化の風が吹き始めた。ここでは台湾の相声の前途を左右しかねない重要な変化を二つ挙げておく。

その第一は、台湾の相声芸人に中国の広い活動の舞台が開かれたことである。これまで台湾の相声芸人は狭い台湾だけで活動することを余儀なくされていた。だが、これからは自分の腕を自分で広い中国で活躍できる。中国の相声芸人と共演することも可能になったわけで、これは台湾で相声を志すものにとって大きなインセンティブになるに違いない。筆者がこの十月台北でお会いした呉兆南氏の弟子、劉増鋳氏（呉兆南相声劇藝社団長、45歳）と劉氏の弟子である姫天語氏（女性、28歳）を例にとると、劉氏は2005年「北京テレビ相声コンクール」に出場、海外出演者部門で優勝、同時に「観衆最歓迎賞」を受賞した。このためさらに翌2006年には中国中央電視台（中央テレビ）の特別番組「春節聯歡晚会（旧正月年越しバラエティショー）」に招かれて出演するという快挙を果たした。春節聯歡晚会は毎年旧正月の大晦日から新年の元日にかけて放映される中国の人気番組。わが国の紅白歌合戦のような国民的な番組で、出演者は一躍国民的スターになる。また2009年には創作相声『我家爸爸（わが父）』で「全国新相声作品コンクール」（天津）優等賞を受賞した。また姫氏も2011年中央電視台の「テレビコントコンクール」で優秀賞を受賞、翌2012年には「全

国新相声作品コンクール」で三等賞と演技部門で優秀賞を受賞した。中国に進出している台湾の相声芸人はいまや決して少なくないであろう。

第二は中国で高名な相声芸人の教を直接受けることが可能になったこと。台湾にはプロの相声芸人が一人もおらず、学ぶべき施設もない。このため劉、姫両氏にしても相声を自力で学ばざるを得なかった。ところがいまや自ら北京や天津に特定の相声名人を訪ね、その話芸を伝授してもらうことも出来るようになったのである。呉兆南や魏龍豪の時代には想像も出来なかった大きな変化である。

「沢山のことを中国で学んだ」、「馬三立に『この部分はなぜこのように話すのか』、また『ここはなぜこのように話さないのか』などと質問するとキチンと答えてくれる。こういうことは台湾ではまったくない。」そう劉氏は語る。馬三立は中国の高名な相声芸人の一人。

台湾の相声界のこのような変化は、相声がもともと中国で発達した、中国の大衆演芸のひとつであることを考えれば不思議でもなんでもない。いわば相声の里帰りみたいなものだ。中台関係が好転したのだから、台湾の相声界にこのような潮流がおきるのは至極当然のことだ。ただわからないのは、このような変化が台湾の相声にどのような影響を与えるのかという点である。これをいうにはもう少し時間が必要であろう。大いに気になるところである。



インタビューに応じる劉増鋳(右)、姫天語両氏(2013年10月台北)

(※写真はいずれも筆者提供)